

はじめに

富雄丸山古墳は、1972年に奈良県教育委員会が発掘調査を実施し、墳頂部に粘土槨（埋葬施設）のある大型円墳であることが判明しました。明治時代に盗掘された副葬品は、現在京都国立博物館に所蔵され重要文化財に指定されています。奈良市教育委員会では2017年度に航空レーザ測量（第1次調査）、2018年度に発掘調査（第2次調査）を行い、直径109mの造出し付円墳（日本最大の円墳）であることがわかりました。

第3次調査（2019年度）では、造出し北西側の斜面が3段に構築されていることが判明し、墳丘の1段目平坦面にめぐる埴輪列が造出し下段平坦面に続いていくことも確認しました。

発掘調査成果

造出しの調査

第4次調査では、造出し南東側にG～I発掘区、北西側にJ発掘区を設定しました。

G発掘区 造出し南東側くびれ部で、円丘部から造出しへと屈曲していく基底石と葺石を確認しました。斜面の葺石は概ね7cm程度の石材ですが、基底石はそれより大きい20cm程度のものを使用しています。斜面の葺石は基底部から約2m分だけが残存しており、それより上部は崩れていました。屈曲する裾部の外側には、形象埴輪の可能性もある埴輪の基部が1本だけ穴を掘って据えられていました。

H発掘区 造出し南東側も3段構造であることを確認しました。また、1段目平坦面にめぐる円筒埴輪列が造出しへむかって屈曲することから、墳丘1段目平坦面と造出し下段平坦面が接続することもわかりました。埴輪列は、造出しへむかって屈曲しますが途中で途切れると想定されます。造出し中段平坦面は前面に向かって低くなるように傾斜しており、造出し中段斜面は、概ね埴輪列が途切れると想定される位置で下段平坦面と一体化するようです。

H発掘区からG発掘区にかけて検出した造出し下段平坦面の輪郭は、造出し前面にむかってハの字に開きます。

I発掘区 造出し中段平坦面に敷かれた小礫を検出しました。中心部に近い位置では、墳丘が削られて小礫がない部分があり、第3次調査で確認した造出し上段の下端の輪郭を示す痕跡とみられます。

J発掘区 造出し北西側くびれ部で、円丘部から造出しへと屈曲していく基底石と葺石を確認しました。これにより、造出し両側のくびれ部の端を明らかにすることができました。この成果をもとにすると、くびれ部間での造出しの幅は約45m、長さ約25mとして復元することができます。

学生との協働調査×調査成果の新たな発信

富雄丸山古墳の調査では、奈良大学との包括連携協定に基づく文化財学科の学生、東京・筑波・法政大学で古墳研究を専攻する大学院生と協働して発掘調査を実施しました。現場では調査技術を継承しますが、連続的な参加が困難な昨今の事情を考慮し、グループLINEで日々の調査成果を日替わり当番でまとめることで、参加者全員が進行状況を常に把握できるよう工夫しました。

例年実施している発掘調査体験事業が新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となってしまったことから、日々の調査状況を埋文公式twitterで発信しています。また、秘書広報課に依頼して動画の作成も行なっており、市公式YouTubeで公開する予定です。

 奈良市埋蔵文化財調査センター twitter アカウント：@naracity_maibun



富雄丸山古墳の発掘調査

—第4次調査—

奈良市教育委員会



富雄丸山古墳の発掘調査

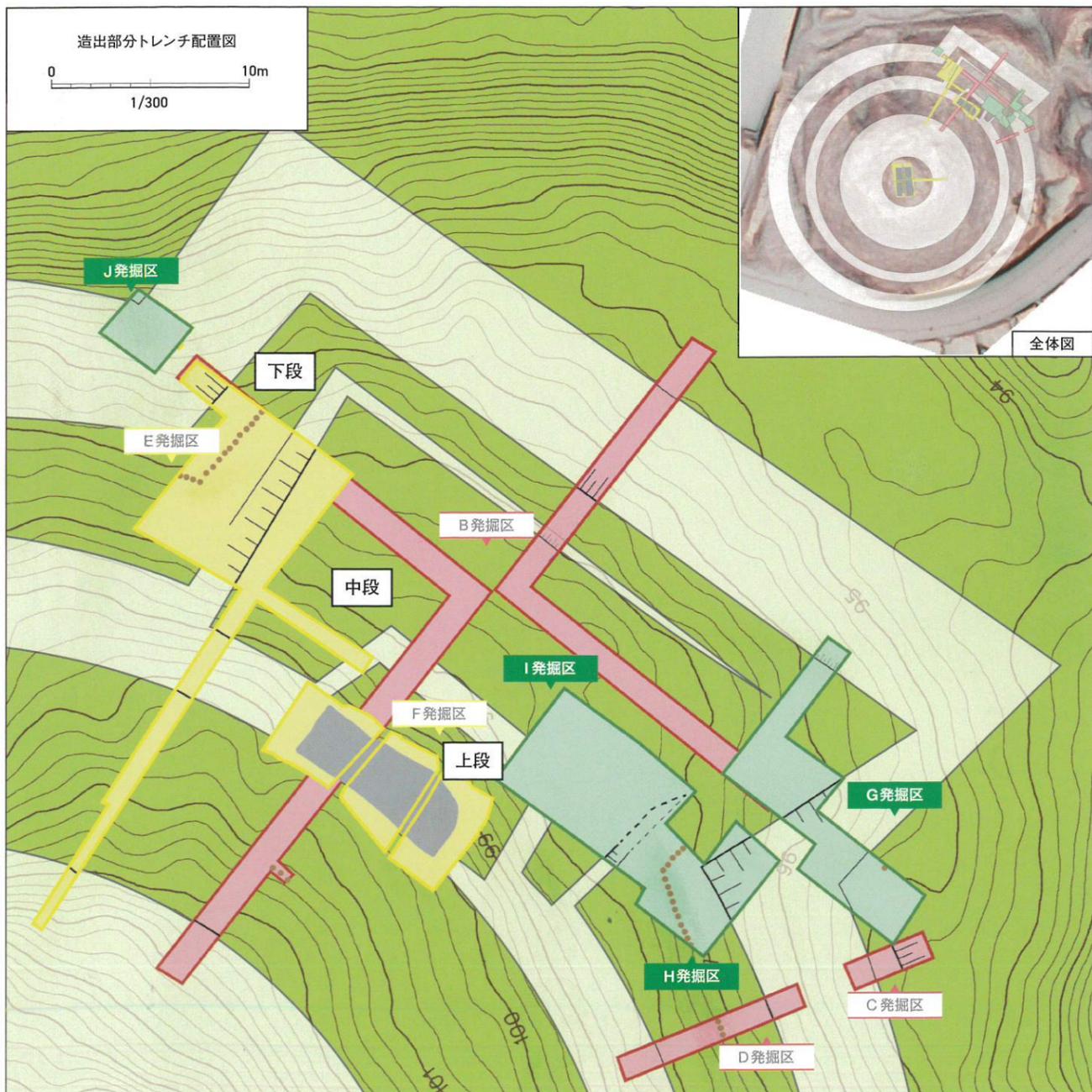
—第4次調査—

編集：奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター 発行：奈良市教育委員会
〒630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地 発行日：2021年2月5日
TEL 0742-33-1821





富雄丸山古墳の位置（下図は国土地理院地図）



発掘区位置図（緑：第4次、黄：第3次、赤：第2次）



墳丘1段目平坦面から造出し下段平坦面への門筒埴輪列（南西から）



造出し南東側くびれ部の基底石と葺石（北東から）



造出し北西側くびれ部の基底石と葺石（北から）